

私はかうして死んだ！

平林初之輔

青空文庫

一

私がこれから話すことは、全部真正銘の事実である。ただ色々な都合で固有名詞だけは、抹消したり、変改したりしたが、事実そのものには一点一画も私は修正を加えなかった。

本文で私となっているのは、私にこの原稿を送ってくれた船井君のことである。私は最初三人称でこの物語をはじめようと思ったが、本人自身の筆で語らせた方が効果的だと思ったので最初の形式をすっかり保存して、若干字句の修正を施すだけにとどめたのである。

彼は本文を読めばわかる通り、去年の二月に肺結核で死んでしまい、死体は火葬場で焼かれ、骨は郷里の墓場に埋められてしまった。それにもかかわらず死後一年たってから、彼は自らペンをとって私にこの不思議な物語を送ってきたのだ。以下は船井君自身の筆になるものである。（平林付記）

*

*

*

船井三郎、私は仮に私の名をこう呼んでおく。職業は鉄工である。生まれは鳥取県の片田舎で、年は三十六歳両親は二十年あまり前に二人とも死んでしまったし、兄弟や姉妹はもともと一人も

いない。いまだに妻も子もない。十五の年父にわかれてから、近所の町を振り出しに、ありとあらゆる労働をして諸国を渡りあるき、地震の年に東京へ出て、今の××鉄工場の職工になったのだ。今では立派な熟練工で四円の日給をもらっているかたわら、城東労働組合の理事をしている。郷里には親類縁者は一人もないので、私はこの二十年の間一度も郷里へ帰ったこともなければ、郷里の人と音信をしたこともないのだ。

こういう全体的に至って散文的な私の境遇は、これから私が話す妙な犯罪——そうだたしかに一種の犯罪だ——に欠くべからざる条件なのだ。以上の条件が一つでも欠けていたら——たとえば私が鉄工でなくて官吏であるとか、私の両親が生きているとかし

たら、私は恐らく死んでしまわなくともすんだであろう。

二

去年の春、議会が解散になって、普通選挙による第一回の総選挙が行われた当時、よほど注意して新聞を読んでいた人は船井三郎すなわちかくいう私が、某無産党の公認で、東京の第×区から立候補しそうな取り沙汰ざたがあつたのが、いつのまにかうやむやのうちに沙汰やみとなつたことをおぼえているだろう。私はその時、ただ、一身上の都合で立候補を断念すると簡単に声明しただけだったが、それには私だけしか知らない奇妙な事情が伏在していた

のだ。

がんらい私は進んで自分から立候補する意志をもっていたのではない。党の支部と組合の幹部との切なる勧めによって、半月間も熟考したあげく、しぶしぶ立候補を決意したのであった。

だがいったん決意した以上は、私一個人としての引っ込み思案はきれいさっぱりとすて、党のため、党の支持する無産大衆のために飽くまでも当選を期する覚悟でいたことは無論だ。そして私の前景気は、じつさい素晴らしかった。自分で言うのも変だが、私は無産党の間では質実な、信用のおける闘士として過分な信頼を受けていたので、無産三派の選挙協定で、他に競争候補を立てないことにきめて三派が一致して私を支持してくれることになっ

た。でもし私が立候補を取り消さなかったら、たしかに私は最高点で当選していただろうと思う。というのは、私が立候補を取り消したあとで、残念ながら三派の協定が破れて無産党の候補が乱立したが、それでもそれぞれ三人とも当選圏近くまで、どうにか漕ぎつけていたからだ。

それはとにかく私はいよいよ立候補と肚はらをきめると、色々な手続きをする上に必要があつたので、郷里の役場へあてて戸籍抄本を取り寄せることにした。すると一週間ばかりたってから役場から実に意外な返事が来た。船井三郎という人間はつい三日前に死亡届が出ており、船井家には今生きている者は一人もないので戸籍は無くなってしまっているから抄本はつくれぬという通知であ

った。

馬鹿々々しい間違いがあるものだとは私は田舎役場の出鱈目でたらめさ加減を憤慨したが、何しろ東京と鳥取県の田舎では手紙などで照会していたのでは容易に埒らちがあきそうにないので、まだ誰にもそのことを話さぬうちに、党の支部へは、ちよつと急用で郷里へ帰つてくると言ひのこしておいて、私はその晩の夜行で東京駅をたつた。

都合のよいことには、二十年振りで帰るのだから、村には一眼め私の顔を見て私のことを思い出す人などはいない。それにその日はあの地方に特有の雪空だったので、村へ着いた時には誰にも会わずにすんだ。私はまっすぐに役場へ行つた。

「僕はこの村の船井三郎君の友人ですが、船井君の戸籍抄本を四通ばかりこさえていただくように頼まれてきたんです」と私はうそを言った。私自身が当の船井だと言ったのでは、色々うるさいことがあつて、まさかその足で引き返してくるわけにはいかないように思つたからだ。田舎、わけても自分の生まれた土地というもの、都会にばかり育つた人間には想像のつかないほど面倒なことがあるものだ。そして私はまたそうした面倒なことが人一倍嫌いなのだ。

小使は妙な顔をして、じろじろ私の顔を見ながら起ち上がつて奥へ行つた。やがて四十五六の、どこか多少見覚えのある眼の細い男が出てきた。

「村長はいま町へ行つて留守でな、わしが助役じゃが、何か用事かな」と彼は私の顔を見ながら言った。どうも田舎の人間は相手の顔をぶしつけにじろじろ見る癖があるものだが、特に私の村ではそれが極端で、なれない人はきつと不愉快に思うだろうと思う。しかし彼は幸い私を知っていない様子だったので、私はやれやれと思つて、さつき小使に話した用向きを繰り返した。

「その船井三郎ちゆう人はこないだ死んだで」

こういいながら、彼は起ち上がつて、大きな帳簿をもつて何かぶつぶつ ひとりごと 独語を言つて引きかえしてきた。

「この通りちゃんと死亡届が出とる」

私の前へつき出された戸籍簿の私の名前の肩にはなるほど朱の

細字で「昭和三年二月二十一日死亡」と書いてあった。

「何か病気でも死んだのですか？」

私は、飛んでもない間違いだとは思ったが、それでも朱色の不吉な文字を見ると少々嫌な感じに打たれながら、他人事ひとごとのようにきいた。

「何でも東京で死んだちゅう話じゃから、わしもくわしいことはよう知らんが、肺病じゃちゅうこった。医者の死亡診断書もここへきとる」

「その診断書をちよつと拝見できませんか？」

「お易やすいこった」

彼は奥へ行って書類の綴じ込みをもつてきて、その一番上の一

枚を指し示した。

死亡の時という欄には昭和三年二月二十一日午後四時としてあった。死亡の場所という欄には、東京市××区××町××番地と書いてあつて、死亡の原因という欄には「肺結核、心臓麻痺併発」としてあつた。死亡者の氏名は、船井三郎すなわち私自身の姓名に相違なく、生年月日原籍等も私自身のそれと寸分もかわつていなかった。ただ現住所という欄が、死亡の場所と同番地になつていたが、それは私の一度も住んだことのない場所だつた。診断した医師の名前は、死亡場所のすぐ近所の町に住んでいる、瀬越雄太郎となつていた。

「ははあ」と私は、私自身の死んだことを証明するこの奇怪な書

類を見おわってから、狐につままれたような気もちで、しかも少なからず不快な気もちで皺しわが枯れ声で言つた。

「そうするとやっぱり船井君は死んだのかなあ、かわいそうに」
 「遺骨もこないだ届きましたよ、ちゃんと壺へはいって、針金でしばって丈夫な箱へ入れてありました。骨のうめてがないので、役場で取り扱って、ちゃんと先祖の墓のそばへ埋めてやりました」
 「そりやどうも有り難うございました」

私は私自身の遺骨の埋葬のお礼を言うとき、何だかほんとうに自分が死んでしまつて、現在そこにいる自分はほんとうに自分の友達でもあるかのような気がして、無気味な寒さを背筋に覺えた。

「火葬場はどこでした？」と私はもう一度事実をたしかめようと思つてこう訊ねた。

「たしか、落合ちゆうとこだったなあ」と彼は小使を顧みて言つた。

「船井君の墓地はどこですか、ちよつとついでにお墓参りをしてこようと思うのですが」

私はよく知っていたけれども、わざとこうたずねて、道を教えて貰つた。そして助役にお礼を言つて、役場を出て、雪の中を、子供の時分にふみなれた道を歩いて行つた。

私は見すばらしい両親の石碑の前にたつてしばらく心から瞑目合掌した。そのそばに新しく掘りかえした、小さな土のもり上が

りができていて、新しい卒塔場そとばが雪の中に倒れていた。そして、土の盛り上がりの上には粗末な白木の位牌が置いてあり、その前に誰がたててくれたのか水仙の花が二三輪たてかけてあった。それを見ると何ともなしに涙が出た。

私は、雪を払い落として位牌の文字を読んだ。

『天涯孤独信士』

裏には、「俗名船井三郎、享年三十六歳云々」としてあった。

私はその晩、村の誰にも見られずに、文字通り墓穴から抜け出した亡者のように、夜汽車で東京へ向けてたった。

私はこの通り生きている。だが、すべての事情は私が死んだことを証明している。この世の中に、私の生きていることを証明する手段は、私が自分でその筋へ名乗り出る以外にない。否、それとてもたしかな手段とは言えぬ。村の人は二十年も前の私を忘れているらしいから、ただ口頭の証言だけで信じてくれるかどうか疑問だ。しかし私は、そんな面倒なことをしてまで私の生きていることを証明する必要があるだろうか？ 私の生きていることによつて爪の垢ほどでも私は利益を期待し得ただろうか？ むしろ私は、誰かのいたずらか知らぬが、私を偶然にもこんな奇妙な位置においてくれたことを感謝したくらいだ。

私は東京へ帰ると急に立候補断念を声明した。そして誰が何ときいても、ただ一身上の都合一点張りで押しとおしてしまった。

これは無産党の闘士として、たしかによい態度とは言えぬ。だが、戸籍のない人間には立候補の資格はないし、代議士になるよりも死んだ人間として生きてゆく方が私には遥かに誘惑的だった。

だが私は誰にも知らせずに、この真相を私一人では是非つきとめてみようと思いたった。というのは、私を殺した人に復讐したり、その人に告白を迫ったりするためではなくて、むしろ、その人に告白などをされては困ると思ったからだ。この不思議な境遇をずつつづけて行ったらどんなことになるかを試してみたいと思ったからだ。

で私はまず私の死亡を診断した瀬越雄太郎という医師をたずねた。

瀬越医院は診断書に書いてあつた番地にまちがいなくあつた。私は名前を偽つて院長に会つた。彼はその時の事情をよくおぼえていて、気さくに何もかも話してくれた。

「ついここから二つ目の通りの最初の路次ろじを曲つた右側の家ですよ。私を迎えに来たので、最初私が行つたのは、亡くなられた前日でした。が、一目見てもう駄目だつてことがわかりました。ずいぶん永年わずらつたものと見えて、両方の肺がすっかり滅茶々にこわされて、まだ生きているのが奇跡だと思われるくらいでしたからね。あの病気の患者は息をひきとるまで意識が明瞭なの

が普通ですが、その男は、まるで、強い酒でも飲んだあのように、ひどく心臓が弱っていて、熱もあの病気の患者としては異常に高く、私が診^みたときは昏睡状態だったので、私はどうにも施すべがないので、ただカンフルの注射をしてあげただけでした。もつとも患者が強く興奮するとああいう症状をあらわすことは珍しくないのです」

「それから二度目に行ったのはその翌日の夕方でしたが」と彼は職業がら少し言いにくそうに言葉をつづけた。「何しろ流感がひどくはやっていて、手放せない患者があつたものですから、ついおくれましてね。けれども、どうせ、はやくお伺いしたところで、どうにもしようはなかったのです。四時少し前に使いの方が来ら

れて、すぐ行つてみましたが、その時はもうこときれたあとでした。実にめずらしい患者でしたよ。何でも私が前日診察した時まで、一度も医者にかけたことはない様子でしたからね。まるつきり、蒼あおざめた剥製の人間という感じで、息の通っていたのが不思議なくらいでした」

瀬越医師の話はこれおわで了つた。

「その男はたしかに船井三郎と申しましたか？」と私はあつけにとられてきいた。

「本人は昏睡状態で、口をきくことはできなかつたのですが、玉村というその家の主人が患者のお友達とかで、患者の住所姓名から原籍まですっかり知っていて私にそう言いました」

私には玉村という男はぜんぜん心あたりがなかったので、

「その主人というのはどんな男でした？」

とたずねてみた。

「まだ年齢は四十前のようにでしたが、あごから頬まで一面に見事な髭をのばしている人でした」

私はこれだけ聞くと、院長に丁寧にお礼を述べて、瀬越医院を去った。

四

私はその足で、院長から聞いた玉村の家へ行ってみた。

ところが、そのあたりには玉村という姓の家は一軒もなく、その家らしいのに、貸家の札が貼つてあつた。

近所でたずねてみると、玉村という人はつい半月ばかり前にひっこしてきて、一週間たつかたないうちに、またどつかへ引越して行つたということであつた。

「その家で、近頃不幸があつたと聞きましたがほんとうでしょうか？」と私は、私にその話をしてくれた、一軒おいて隣の京染屋のお内儀かみさんにきいてみた。

「妾わたしはよく知りませんけれど、何でも、引越しの前の日にお葬式の自動車が来て、死人を焼場へつれて行つたとかいう話でした。でも別にお通夜のあつた様子もなかったし、お経を読む声も聞こ

えませんでしたわ。そして、その次の日のおひる頃にすぐお引越しになったのです。ずいぶん変った人でしたわ」

「どこへ越して行つたかわかりませんか？」

と私はたずねてみたが、もちろん彼女は知っていなかった。そして、ひっこしてきてから一週間かそこらしかそこにいなかった。ので、近所の人は恐らく誰も知らないだろうということであつた。それで私は近所をたずねることは断念したが運送屋にきけばすぐにわかるだろうくらいにその時は考えていたのだ。ところが、京染屋のお内儀かみの話によると、玉村という男の引越しの時には、別に運送屋が来た様子はなく、本人はトランク一つもってタクシーで行つたきりで、その翌くる日差配が来て貸家の札をはって行

ったということであつた。

そこで私は差配の家の番地をきいて、そこへ行つてみた。

「玉村君はどこへ越したかわかりませんか？」

と、私は前から玉村の知りあいのような句くちよう調でたずねた。

「一週間ばかり前にお引越つしやしになつたのですが、どこへとも仰お

言つしやいませんでした。こんなことがあるといけないと思つて、移

転先を伺つたのですが、いま番地をおぼえていないからあとで知らせると仰言つていました。でもいまだに何ともご通知がありませんのですよ」

差配さはいのお内儀は、いかにも申し訳なさそうに、私の顔を見なが

らこう詫わびるように答えた。

「荷物はトランク一つきりだったそうですね？」

「それがね、不思議なんですよ。近所の貸布団屋から夜具を一組お借りになったようですが、それにはこないだ亡くなられたご病人が、おやすみになってらしたようですから、あの方はこの寒いのに夜具なしで、暮らしてらしたにちがいないですよ。まさかあの重病人と一緒に、おやすみになるわけには、いきませんでしょうからね」

私はこの話をきいて、玉村という男はきつと晩にはこの家にとまったのではないに相違ない、この重病人をたった一人空家同然の家に寝かしておいて自分はどこかへ泊まりに行つたに相違ないと考えた。これは実に言語道断なことだが、この寒いのに一週間

も夜具なしで暮らすということよりも、その方が合理的だと私は考えたのだ。

五

私は玉村の貸屋を中心として、その近所のタクシー屋を片っ端から探しはじめた。そして、二日かかって二十七軒目のタクシー屋で、やっと、問題の日に、頬から頤^{あご}へかけて立派な髯^{ひげ}の生えた、トランクを一つもった男を、件^{くだん}の番地からのせて行つたという運転手を発見した。

運転手は、私を警察の者とも思つたのか、非常に恐縮して言

った。

「何か間違ひでも御座いましたか？」

「なあに、間違ひという程ではないんだが、ちよつと行方をさがしてゐるんだから、知つてゐるなら、すつかり話して貰いたい」

タクシーの運転手にとって何よりも恐ろしいものは警官である。彼らは何か事故が起これるとすぐに、彼らの唯一の生活の資本である運転手免状を取り上げるぞと脅かされる。その運転手も一瞬に私を警察の刑事と勘違いしたおかげで、おつかなびつくりで、すつかり話してくれた。

それによると玉村は、本郷××町の立憲××会本郷支部という看板のかかった家の前で車を下りて、たしかにその家の中へはい

ったということであつた。

私は、早速その運転手の自動車にのつてその家の前まで行つた。

「こちらに玉村さんという方はいらつしやいませうか？」

と私は中へはいつてたずねた。

「そんな人はこちらにはおらん」と二十歳前後の紺^{こん}紺^{かすり}の着物をきた筋骨たくましい青年がぞんざいに答えた。

ははあここは××会の壮士の巢窟だな。道理で、玉村の容貌風采がそれらしいと思つたと私はひとりで合点した。

「頬からあごへかけて立派な髯を生やしていらつしやる方なんですが……」

「君は誰だ。一体、何か用があるのか？　大方××党のスパイだ

ろう。我が党の情勢をさぐりにきたんだろう」

一人の壮士がこう答えて、凄いい眼つきで私の様子をじろりと見た。

「いいえ、実は本部の山岡先生からの使いで、内々でこちらの主人にお目にかかる用件ができたものですから」

私が、××会の山岡総務の名前を口に出すと、壮士連は急に態度をかえて、ちよつと二階へ上がったが、すぐおりてきてどうぞお二階へと案内した。

私は二階へ上がって行つた。

玉村という男は事務机に向かつて何か忙しそうに書き物をしていたが、私が上がってゆくと、急に、私の方へ向き直つて、さあ

どうぞと鷹揚おうように椅子をすすめた。

「ちよつと密談があるので五分間ばかりお人ばらいが願いたいのですが」と私は取り次ぎの男に気兼ねする様な風をして言つた。

「よろしい、君、下へおりていたまえ」

親分の命令で、若い壮士はとんと下へおりて行つた。

私はわざと一分間ばかりだまつていてから、突然、非常にはつきりとした声で言つた。

「僕は船井三郎という者です」

私はたつた一言言つて、じつと眼をすえて相手の表情を見ていた。

人間の表情というものが、こうも急激にがらりと一変するもの

かと私はその時に思った。壮士の親分らしく、悠然と虚勢を張っていた玉村は、急に真つ青になって、唇のあたりを痙攣^{けいれん}的に細かくふるわしながら、まるで、電気をかけられたようにすつと起ち上がった。私も、彼が何か暴行を加えるつもりだろうと思つたので、反射的に起ち上がったが、彼が起ち上がったのは、あまりにひどい驚きのためで、決して暴行を加える意志ではないことがすぐにわかった。

「悪かった、君、僕が悪かった。堪忍してくれ給え」

こう言いながら彼は私の前にとつぜん^{ひざまず}跪いたので、今度は私の方があつけにとられたくらいだった。壮士というような人間の心の単純さに私はじっさい吃驚^{びっくり}したのだった。

彼はすっかり私に話してくれた。それによると、彼は、労働者仲間に人気のある私が××党から立候補すると聞いて、大変だと思ひ、私を死んだことにしておけば、後ではどうせいたずらだということがわかるにしても一時立候補の手続きが出来るからその間に、自党の候補が機先を制して猛運動をつづけてゆけば、私の地盤がくつがえせると思つて、あんなたちの悪い狂言を仕組んだのだということであつた。

「君の一存でやったのか、党の幹部も知っているのか？」と私は興味をそそられてきいてみた。

「むろん僕の一存でやった仕事で、誰も外には関係者はありません。もつとも成功すれば報酬を貰うことにはなっているんですが

ね」

「それにしても、僕の身元がよくわかったねえ」

「それは君のつとめている工場です。あの工場では君の立候補を喜んでいないから、こちらの便宜を十分はかってくれましたよ」

「では、あの病気で死んだのは誰だい？　君は罪もない人間を殺したのではないか？」

この質問を彼はひどく恐れていたと見えてあわてて答えた。

「飛んでもない、ちがいます。あれは浅草で行き倒れの行路病者こうろをひろつてきたんです。僕はずいぶん世話をやいて、医者にもかけてやりましたよ。もちろん、もう二三日の寿命しかないとは思

つていたんですがね。ああいう人間が必要なら浅草辺を一日かかればいつでも探し出せますよ。本人も道ばたで野たれ死にするよりや畳の上で死んだ方が楽ですから功德ですよ」

こう答えたとき、彼の額には汗がにじんでいた。私は彼の言葉をほんとうだと思った。いずれにしてもその点を追窮するつもりはなかったので質問をつづけて行つた。

「で君はあの貸家にそんな大病人をひとりでおいたのだね？」
「どうもあのひどい肺病やみと一つ部屋の中に寝ることもできませんし、それに夜、家を空けちゃこちらで、あやしまれますからね。玉村という偽名であの家を借りて、あの病人をひとりで寝かしといたんです」

「そして病人がいよいよ駄目で口もきけないということがわかってから医者をやびに行つたのだな？」

「そうです。でも僕が病気を悪くさしたのではないのですよ」

「だが、君は病人にウイスキーか何かのませやしなかつたか？」

「そんなことまでわかりましたか」と彼は額に脂汗をにじませながら言つた。

「実は、あの病人が、とても回復の見込みはないから、この世の思い出に好きな酒を一杯だけ飲ましてくれとせがむもんですから、ブランデーを一杯のましてやつたのです。ところが彼奴はひどく喜んでお礼を言っていたかと思うと、急に昏睡状態に陥つてしまつたのです」

「では、その死んだ男は、まだ生きていることになっているんだな？」

「そうです、選挙がすんだら、間違いを届け出て訂正して貰おうと思っていたのです」

「では、その男の戸籍はわかっているのか？」

「僕がその男を家へつれてきたとき、大変よろこんで、死骸の始末だけしてくれと言つて、僕に身元をすっかり話してくれました」

「そんなことを届け出たら君は大変な罪になるぞ」と私は、少し考えるところがあつたのでおどしてやつた。

彼はまた菜っ葉のように蒼くなつた。こういう荒くれ男が青くなるのは、見ている者には実に愉快なものだ。

「だが」と私はすっかり勝利者の優越感を味わいながら言った。

「君がすなおに白状したから、僕はこんな問題を警察沙汰にしようとは思わん。と言つて死んだ男を生きたことにして、生きている僕を死んでしまったことにしておくわけにもゆかんから、これは僕から届けて訂正してやる。君は、前途有為の青年だ、もう二度とこんな悪いことをしちやいかんぞ。君の一生を今棒に振らせでは気の毒だから、その死んだ男の戸籍を僕に渡したまえ、僕の方からそつと手続きをすまして、君の名は出さずにおいてやる」

彼は、私の寛大な処置に非常に感謝して、本箱の抽斗ひきだしから紙片をとり出して私の方へもつてきた。

このことがあつてからもう一年になる。むろん私はいまだに、

そのことは届けていないのだ。玉村は、私の方ですっかり手続きをすましたものと思いこんでいるから、彼の方で届け出る気遣いはない。

こうして私は死んでしまったのだ。そして今でも死んだことになっているのだ。私には墓場もあれば、死亡届も出ており、医師の診断を経て死体は落合の火葬場で焼かれて、遺骨は先祖の墓にうめられているのだ。すべてが少しも手続き上の違反もなく、手落ちもなく、私の死を証明しているのだ。

私は今では私自身の皮肉な位置になれてしまって、気味わるくも何とも思っていない。だがもし私が、大罪をおかして死刑にでもなるとしたら、裁判官はいったい誰に死刑の宣告を下すだろう。

死んでしまった私にもう一度死刑を宣告するだろうか？　もし私
 が何かの罪で逮捕されるとしたら判事は誰に向かって令状を発す
 るだろうか？　骨になって埋められている私をどうすることがで
 きるだろうか？　私に恋人ができて結婚するとしたら、彼女は、火
 葬場の灰になった私を花婿として抱擁するだろうか？

青空文庫情報

底本：「平林初之輔探偵小説選」
「#」「1」はローマ数字、1-13-2
「1」〔論創ミステリ叢書1〕 論創社

2003（平成15）年10月10日初版第1刷発行

初出：「新青年 一〇卷七号」

1929（昭和4）年6月号

入力：川山隆

校正：門田裕志

2010年7月4日作成

2011年2月23日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.waozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

私はかうして死んだ！

平林初之輔

2020年 7月13日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>